

自然と人間との共生

# KOSMOS

第11号

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

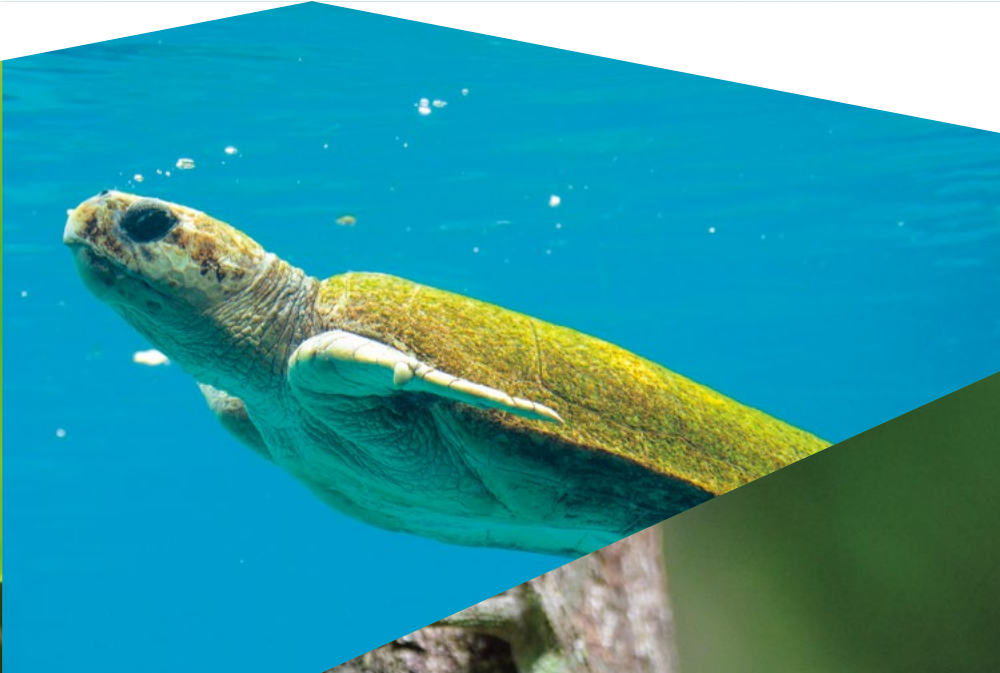


EXPO'90  
FOUNDATION

こすもす

2023

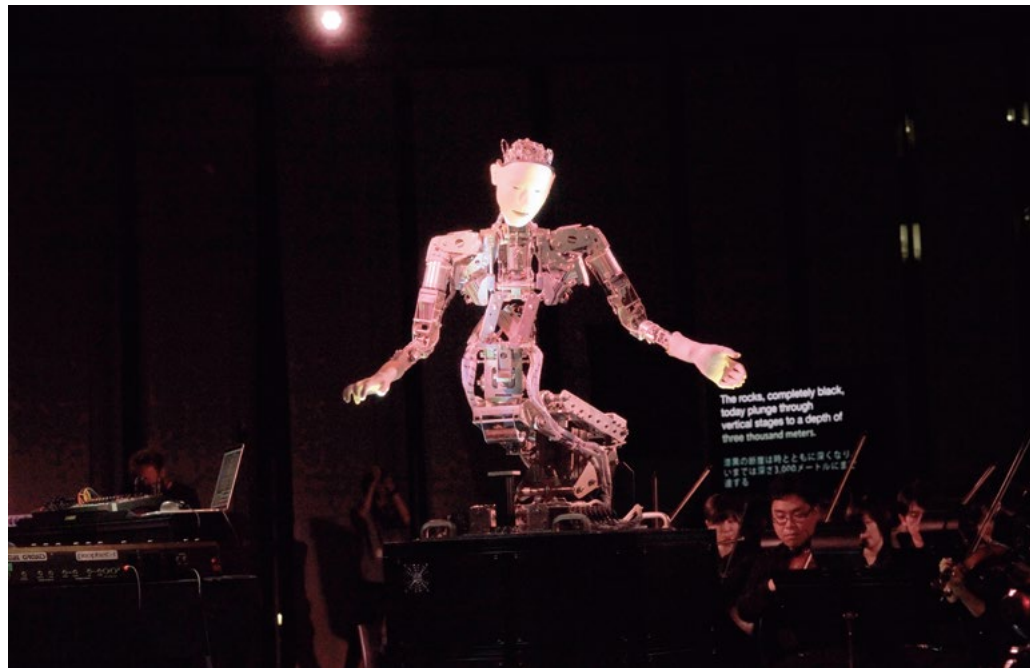
春



いきる

生命を考える  
哲学・思想の視点から





アンドロイド「ALTER 2」がオーケストラを指揮し、それを伴奏に自ら歌う渋谷慶一郎のアンドロイド・オペラ「Scary Beauty」(2018年7月、日本科学未来館)より

撮影：新津保建秀

アンドロイド・プログラムおよび設計：東京大学 池上研究室、大阪大学 石黒研究室

# いきる 生命を考える

## 哲学・思想の観点から

10号、11号のテーマ「生命」は、「自然と人間との共生」という理念の重要なファクターである。生命の祭典と称した花の万博は、命の大切さと、人間も自然の一部という日本人の根源的感覚を世界に示した。生命は他の生命と関わり存在し、それは、「共生」として、環境保護やSDGsなどを超越し、宇宙船地球号の乗組員全員の理解と愛、秩序ある美しい世界であれという、KOSMOSに通じる祈りの言葉である。

今号は、今後のポストコロナ時代において生命から共生を考えるヒントを探る。

3	20	17	14	11	3
「対談」	孤立とケアと死	供養塔	人・動物・生命系	利己と利他の哲学史	生命を考えている「私」も生命である
生命を考えている「私」も生命である	新たなケアの文化の生成と死生観	森羅万象といのち	命の線引きを考える	今求められる「自分」の再構築	サイエンスと倫理が結びつくとき
サイエンスと倫理が結びつくとき	島園進	早川篤	野家啓一	小川仁志	森岡正博
サイエンスと倫理が結びつくとき					池上高志

## 生命を考えている「私」も 生命である

### サイエンスと倫理が結びつくとき

森岡正博

早稲田大学教授  
哲学者

池上高志

東京大学大学院教授  
物理学者

なくなりつつある  
文系と理系の垣根

森岡 量子力学や宇宙論を学べば、生や死についての研究ができると思っ  
て大学に入学したのですが、すぐに勘  
違いだとわかり、文学部に転部し、現  
在まで哲学を研究しています。当時  
の初年次教育のキヤンパスではまだ複  
雑系の考え方がなかったたので、理系  
と文系の間は遠かった。その後、複  
雑系の理

論が広まり、それまで理系で扱っていた事象を文系の教育でも扱うようになりまし  
た。受験で文系と理系を分けているからみんな錯覚  
していますが、文理の垣根はないと思っ  
ています。特に生命に関しては、文系からも理系  
からも対等にアプローチできると思っ  
ています。池上 東京大学ではずいぶん前から理  
系と文系の溝を埋めようとしてきました  
が、実際にはほとんど開いてい  
った。その流れが、コン



ハンス・ヨナス 著  
『責任という原理 [新装版]』  
加藤尚武 監訳、2010年、東信堂  
自然に対する人類の歴史的責任を告知  
・論証した1979年刊の『Das Prinzip  
Verantwortung』の邦訳版

### ハンス・ヨナス (Hans Jonas) 1903-93

ドイツ生まれのユダヤ人で、生命・技術倫理で国際条約などに広範な影響を与えた哲学者。その思想は、戦時中における師・ハイデガーのナチス賛美や、アウシュビッツ収容所で母親を亡くす体験から、社会的・倫理的問題を主題に思索を重ね練り上げられた。主著に『責任という原理』(1979年)など。

溶液にオレイン酸を溶かしておき、そこに無水オレイン酸という油性物質(または無水オレイン酸を混ぜた油)を垂らすと、〇・一ミリほどの小さい油滴ができます。こ

れは拡散して壊れずに自分で動きだします。まず動くことが生命だと考えたこの科学実験を通して、ヨナスやデイ・パウロの思考の実験パージョンというか、生成パージョンをいろいろ考えてきました。その後十年ほど経って、もう少し集団的な知性というか、集団になることで初めて生まれてくるもの、このことを考え始めました。その中心にある考え方は、ヴァレラやヨナスのシステム論と、哲学における主体やミニマムセルフ(最小限の自己)といったものを統合し、新しい集団をどう作るかということです。集団を考えることで、はじめにインディビジュアリティ

(個性性)はどう生まれるのかや、記憶は生命とどう関係しているのかが議論できる土台ができると気がつきました。

**共通でありながら多様、多様でありながら共通**

森岡 ヨナスは「代謝生命モデル」を唱えたのち、一九七〇年代に環境問題に言及しはじめています。著書『責任という原理』の中で、「人類は次の世代をつくり続ける責任を持っている」ことを、いかに哲学的に基礎づけられるかと深く考えました。同時に、人類が他の生命との関係を保つための環境保護運動を哲学的に基礎づけました。

付け加えると、ヨナスはユダヤ人で、家族を強制収容所で殺されています。ヨナスが人間は次の世代を再生産しないとイケないと強く主張したのは、ユダヤ人の同胞が収容所で殺されたことへの後悔や悔しい思いがヨナスの生命哲学の根本にあるからだと思えます。だから、生命が次の生命を生ん

### フランシスコ・ヴァレラ (Francisco Varela) 1946-2001

チリの生物学者(認知科学)。アジェンデ社会主義政権の崩壊後、政治的弾圧を逃れて亡命し、ドイツやアメリカで教鞭をとったのち、1980年にチリに帰国。1986年以降はパリを拠点とし、フランス国立研究センターで研究部長を務めた。1998年花博記念協会主催「コスモス賢人会議」で来日。チベット仏教と科学者による心の科学の発展をめざすも、肝臓がんにより54歳で逝去。オートポイエーシス理論の提唱で知られる。

でいく力の起源を遡ると、三十数億年前の細胞膜に行き着くという大きな視点があった。その進化の尖端にいる現在の人類は、生命が三十数億年培ってきた自由な冒険を根絶やしにしてはならない。人間は三十数億年の生命全ての使命を全て背負っていまここにいる。その責任を次にバトンタッチすることは使命だと言います。彼が二十世紀の終わりにやろうとしたことは、細分化していくサイエンスへのアンチテーゼです。

ピュータの進化によって変わってききました。特に二〇一〇年以降にディープラーニング(深層学習)が生まれ、ラーラング(深層学習)という巨大な言語モデルが生まれたことで、その後の「チャットGPT」にみるように、プログラムの考え方が変わったことが大きかったと思います。

哲学や思想を発展させる科学技術も用意され、文系にとってもコンピュータの計算技術が学問を発展させるうえでなくてはならないものになっていく。理系と文系の溝はどんどん埋まってきて、それが統合されつつあると思います。

森岡 一九七〇年代に、人工知能のフレーム問題が論じられるようになりまし。人工知能は問題解決のために何が自身にとって重要なファクターで、何を無視してもよいのかを自律的に判断することができない。逆に言えば、人工知能にできないことが、なぜ人間にできるのかという問題です。これは哲学から見ても興味深い問題だったので、いろいろな哲学者が言

及していました。なかでも、六〇年代から八〇年代に活躍した哲学者のハンス・ヨナスが提唱した哲学的「代謝生命モデル」という考え方は、最近再評価されています。池上 ヨナスはいまや、人工生命の中心となりうる哲学者とされていますね。

**原始の細胞が手に入れた「自由」と「死」**

森岡 ヨナスの「代謝生命モデル」は、細胞膜を通して物質が入れ替わり代謝することで生命という独自の存在が現れたと考えます。彼はその時に出現したのが「自由」だと言いました。なぜなら、物質循環の制約から解放されたからです。この解放をヨナスは自由とみなします。「人間とは自由な存在だ」とはよく言われますが、その「自由は進化論的にみると三十数億年前の細胞膜の成立まで遡る。原始の細胞は細胞膜を手に入れることで生命という「自由」を手にしたが、同時に「死」も手にしてしまった。細胞膜が壊れると細胞

内のシステムが働かなくなる。それは一種の「死」と考えられるからです。

つまり、原始に誕生した生命は、誕生した途端に傷つきやすさ、壊れやすさを引き受けざるを得なかった。自分が傷つきやすく、壊れやすいことを引き受けることによって「自由」を手に入れた。生命は誕生のときから死を担保としたある種の「賭け」をしていた、というのがヨナスの考え方です。

これは、さきほどのフレーム問題と結びついていきます。生物学者のフランシスコ・ヴァレラは、現在のコンピュータモデルは、自分の傷つきやすさや壊れやすさを本質的に含んでいない。うまくいけばコンピュータはいつまでも動き続けますから。人工知能と生命との差はそこにあると考えました。こうした話は、哲学の「自由意志とは何か」や、生物学の有機体のシステム論のような話と結合している世界であり、文系も理系もありません。

池上 私がハンス・ヨナスを知っ

### チャットGPT

サンフランシスコのOpenAI社が2022年11月に公開した人工知能ツール。対話型で幅広い質問に詳細で自然と感ぜられる回答を生成することから注目されている。情報だけでなく、詩や小説、音楽などを生み出すこともできる。一方、社会への弊害を懸念する議論も高まっている。

たのは、英国サセックス大学のエゼキエル・デイ・パウロを通してです。彼はヴァレラを発展させるために、ヨナスの考えた単体の細胞ではなく、複数の細胞の社会性としての主体のようなことを唱えました。「プレカリアス(不安定)な存在としての主体」を考えて、そこから生命を捉えようとしています。

森岡 ヨナスの哲学的生命論は、集合的な生命にはあまり触れていませんからね。

池上 そこを拡張しようとしているのが現在です。私は、二〇〇五年くらいに「動く油滴」という実験を行いました。アルカリ性の水

こうした知の巨人の考えを引き継ぎ、生命を中心に、理系も文系も統合したうえで未来を見ていく発想が必要なのではないかと思っています。

## 原始の細胞が手に入れた「自由」と「死」

**池上** 私の教え子で、「スマートニュース」を創設した鈴木健が二〇一三年に著した『なめらかな社会とその敵』の中に、いまの話に關係していることが二つあります。一つは、彼が「核」と「膜」という観点から社会システムを考えたことです。核と膜を社会に応用すると、核は社会を統治しようとする強い権力者や思想であり、膜は細胞の内と外のように、コミュニケーションに属するか属さないかといった、いわゆる区別化とみなすことができます。彼は、核や膜の構造は人間社会の構造や進化に見込めることができるが、それを打ち壊すことが重要だと主張します。ネットワークによってもう少し社会をなめらかにし、これからの社会

を、核も膜もないものとして捉えられないかと言います。

二つ目は、そうした新しい社会で作られる倫理とはどういったものか。彼の考える倫理は人間社会中心の倫理ではなく、生態系としての倫理——人間も地球という生態系の一部であって、それゆえに全うしなければいけない役割や全体を考える行為が必要だとしていいます。しかも、その生態系は生物の生態系だけでなく、AI（人工知能）やAL（人工生命）も含めたうえで作られる生態系を考え、そこで新たな倫理が規定されるべきだ、と言っています。

**森岡** 冒頭で述べたように、私のものを考える出発点には、生きるとは何か死ぬとは何かという生命の問いがあります。ただ、生と死には、親しい人の死や、赤ちゃんの誕生といった人間の生死の面もあれば、細胞の話のような生物としての生命の問題もある。

この二つは、ともに生命の問題であるのに、水と油の面がありません。例えば、末期医療におけるケ

ないことを抱え込む姿勢」です。科学は白か黒か決着をつけたがる

ところがありますが、その中間には文字通りグレーの領域がある。白黒を決めずに、決まらないままシステムの中心に取り込んで動くことがこの二つをつなぐことだと理解しています。

**ヴァレラ**とは最後の何年か交流がありました。彼は肝臓がんで、父親から移植されたけれど助からないとわかっていました。その時期に考えていたのは「リブドボディ（生きた身体）」という、あくまで主体的な身体の問題でした。ロボットの身体という時の身体と、自分の心がある身体を分けて自分の死を見つめた。その重要さをより深く考えたのではないかと思えます。

## 生命を考えている「私」も生命である

**森岡** 私や親しい人が死ぬ時のような精神世界的な話と、細胞とは何かという話を結びつけるツールとして、複雑系科学のほかにも

ろいろな考え方が出てきて接着剤のようにつなげてほしいと、ずっと思っていました。

**池上** その動きはすでに始まっている。例えば、多くの人が金儲けだと思っているブロックチェーンやNFT（偽造不可な鑑定書・所有証明書付きのデジタルデータ）、イーサリアム（ビットコインに次いで将来性があると言われる仮想通貨のひとつ）というOS上のできるウェブ3.0や、DAO（分散型自律組織）などは、そうした思想で作られています。

つまり、役員がいて社長がいて

平社員がいてという階層構造的に作られている会社や大学の有り様でなく、安全に平等なたちで成り立って動いていく社会を考える。そういう社会はブロックチェーン上であれば可能であるという発想をもとに、仮想世界での構造化を使うことで社会をなめらかにしていこうとしているわけです。

その意味では、二〇一〇年以降に私たちが獲得した科学技術、インターネットを中心に「データ・プラットフォームやブロックチェーンは、社会のあり方や価値観を一八

度転換し、細胞と私という生命

アや生きる意味といったことを話す場で、細胞膜の成立や代謝の話は出てきません。一方で、バイオリジカルな場で「生命とは何か」の話をする時細胞の話や生態系の話になり、私が生まれ死ぬ意味は何かは問題になりません。

この全く違う二つを、私たちは不思議なことに日常言語では両方とも「生命(LIFE)」という同一の言葉で表しています。両者をつなぐにはどうしたらいいのでしょうか。

**池上** ヴアレラとエレノア・ロツシュが書いた『エンボディドマイ

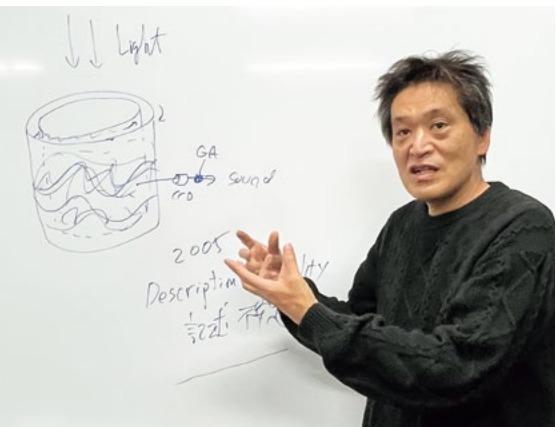
ンド(身体化された心)』という本があります。この本の前半は、まさに客観的に見る生命の問題を扱い、後半は仏教思想から考える「私」の視点から見た生命について議論しています。認知や生命という以上は後半の視点を欠かすことはできませんが、科学として成立させるためには前者の視点は絶対です。しかし、前者を選ぶことによって後者が取り込まれていないことの欠点が見える、といった議論です。

この議論の出口の一つは中道性——自分の言葉でいうと「決まら

感とのつながりに関して、科学技術の力で結びつけつつあると思えます。

**森岡** ヨナスは、そこをつなぐためには科学者自身の身体に着目しないとイケないと強調していますね。一般的な科学者にとって——顕微鏡で細胞の動きを見るのが典型的ですが、研究対象は顕微鏡で見ている細胞であり、それを見ている科学者の身体性は研究対象の枠の外に置いています。しかし、顕微鏡を覗いて研究している科学者自身が細胞でできているわけ

**池上高志** (いけがみ・たかし)  
1961年、長野県生まれ。複雑系・人工生命研究。人工生命(ALife)に新たな境地を切り拓き、研究を世界的に牽引。複雑系と人工生命をテーマに研究を続ける傍ら、アートとサイエンスの領域をつなぐ活動でも注目される。共著書に『人間と機械のあいだ心はどこにあるのか』『作って動かすALife』など。



**森岡正博** (もりおか・まさひろ)  
1958年、高知県生まれ。東京大学、国際日本文化研究センター、大阪府立大学現代システム科学域を経て、現職。哲学、倫理学、生命学を中心に、学術書からエッセイまで幅広い執筆活動を行う。著書に『無痛文明論』のほか、草食系男子ブームの端緒となった『草食系男子の恋愛学』など。



渋谷慶一郎、池上高志によるサウンド・インスタレーション《Filmachine》(2006年、山口情報芸術センター)。円筒形の側面に配置された24個のスピーカーを用い、立体音響システムHuronを使ってダイナミックな3次元のサウンドスケープを作り出す。サウンドファイルは、カオスアトラクターやセルオートマトンの時空間パターンをもとに生成された

## 結論を重視しない 研究の世界とアートの世界

身体性や記憶や歴史性を一緒に体験することで、アートは立ち上がってくるし、何かつなぐことができるのだと思います。

森岡 みんなで観察可能な世界と、実際に自分が生きて死んでいく内面の世界をつなぎ、活性化させるツールの一つがアートなのではないか。アートというプラットフォームにはいろいろな人が入ってこられるし、アートのプラットフォームに我々は身体性を持って入らなければいけない。科学者が顕微鏡の対象だけを見ているようなモデルは、アートでは成立しないというか、そういう眼でアートを見ても全くおもしろくないし、よく理解できない。

池上 アートというプラットフォームにはいろいろな人が入ってこられるし、アートのプラットフォームに我々は身体性を持って入らなければいけない。科学者が顕微鏡の対象だけを見ているようなモデルは、アートでは成立しないというか、そういう眼でアートを見ても全くおもしろくないし、よく理解できない。

森岡 「サイエンスは人類をどこへ連れて行くのか」を考えるにあたって、二十世紀半ばに大きな力を持ったのはSF(サイエンス・フィクション)だったと思います。荒唐無稽の話も含めて、作家が想像力を広げて描く未来社会の姿から、自然科学を牽引する発想がたくさん出てきた。さらに、SFの中から哲学的な問題も提起されてきた。例えば、スタニスワフ・レムの『ソラリス』は、異なった存在に会うとはどういうことをテーマとしています。こうした作品が、他者とは何かを考えるときのいろいろなイメージを与えてくれたと思います。



スタニスワフ・レム 著  
『ソラリス』沼野充義 訳、  
2015年、ハヤカワ文庫

ポーランドのSFの第一人者が「人間以外の理性との接触は可能か」を問いかけたSF小説の金字塔(1961年刊)。惑星ソラリスの謎の解明のため、ステーションに送り込まれた心理学者ケルヴィンと、地球外の知性体との遭遇について描かれた、最も哲学的かつ科学的な小説。タルコフスキーとソダーバーグによって2回映画化された。邦訳版は、レム研究の第一人者によるポーランド語原典からの完全翻訳

池上 私がアートに関わる理由も、オチをつけることを重視してないからです。落語も好きですが、落語は本当はオチがないのです。話の中の世界観とか、話し手が作

それでは研究する対象と研究している自分が同じだった場合はどうするかは見えてきません。

池上 自己言及性と生命の問題は切っても切り離せない関係にありますし、それは私自身の研究としても大きなテーマです。エンドフィジックス(内部観測)は、私の言葉では「内側から見え見えなものがある」ことです。どこから見ても変わらないと思われていることも、システムの内側からしか見えてこない構造もあります。



「養老天命反転地」(岐阜県養老町)は荒川修作とマドリン・ギンズの構想に基づいて作られた公園。約18,000㎡の広大な敷地には様々な施設があり、起伏した地面を歩くうちに平衡感覚を失う「楕円形のフィールド」(写真)など、不思議な仕掛けを体験できる

## 観察可能な世界と内面の世界をつなぐアートの力

森岡 細胞的な生命とは何かという問題意識は、本当は自分が生まれ死んでいかなければならない事実をどうするのか、その点に繋がっているはずなんです。しかしこの二つをシームレスにつないで把握する知を我々はまだはつきりとは持てないわけですね。

池上 その意識を持っているのはアーティストだと思います。美術

家の荒川修作とは亡くなる前の三、四年付き合いました。荒川の作品「養老天命反転地」の背後の思想には、生きてきて死ぬ、といったことをどうすれば解消できるのかがあったと思います。

私たちは無意識に、生まれてから死ぬまでと、それ以外を分けて考えていますが、荒川はその境を取り払い、生きている状態と死んでいる状態はそれほど深刻な境ではない。「私」は私の周囲に数千万も分散して成立させられているものであって、「私」を唯一無二のものとして考えることによってもたらされるペシミスティックな想いを潰そうと考えていた。それを彼は「ランディング・サイト(降り立つ場)」と表現していました。死を「ある点で断ち切られるように終わる」と捉えると、自分自身が変わってしまうし、つらい。しかし、そこをなめらかに考えたら全く違う人生観や倫理観を持てるのではない。人工生命をも含めた倫理観を考えれば、そこにつながっていくように思います。

森岡 ご自身もアート活動を続けておられますね。

池上 アート活動はもう二十年以上やっています。きっかけは、カールステン・ニコライという坂本龍一などと世界ツアーをやっているドイツのミュージシャンが、ニューヨークの本屋で私の論文を見て、駒場の研究室に来てくれたことです。その論文は、ノイズにはパッシブなノイズとアクティブなノイズがあり、ノイズを作り出すのは後者で、それがあって生命システムは回っているのだという内容でした。彼は、この論文は自分がやっているノイズミュージックと同じだと言いました。

その後、音楽家の渋谷慶一郎と知り合いになり、二〇〇五年に私を持つていたプログラムから複雑なノイズを作り出し、それをもとに渋谷くんが作曲するパフォーマンスを二人でやりました。その時にカオスを作る最小のサイズとして、テイラー・クエット装置を使ってコンピュータで生成した、ノイズを鳴らすサウンド・インスタ

り出している仮想世界に入っているって楽しむことが大切で、「はい、もう時間ですよ」というくらいの意味です。私の研究活動もアートの活動も、オチがないままに世界観や世界の有り様を見せることに終始しています。

**森岡** オチをつけるよりもビジョンを開くことが、アートの本質なのでしょね。それは、私が哲学の論文や本を書く時に、何らかのかたちで絶対に影響していると思います。

**池上** 音楽家のジョン・ケージは、「人生の可能性を広げることはアートの役割だ」と言っています。音楽と生命には似たところがあり、どちらも背後に強い抽象性、規則と形式がある。一方で、音楽や生命には、規則や形式では捉えることのできない「意味」が出現しています。悲しい音楽も音楽自体が悲しいわけではないし、悲しんでいる人間の細胞やそのネットワークが悲しんでいるわけではない。では悲しみは外部観測者の意味づけの問題なのか。

## 人間の矛盾の根底にある利己と利他

**人**

問とはなんと矛盾に満ちた存在なのだろうか？ ジキルとハイドとまではいわないが、

少なくとも誰もが善と悪、やさしさと怒り、そして利己と利他といった相反する二つの性質を準備している。

それによって同じ人間が、時にまったく異なる判断をしたり、異なる行動を取ることがある。そういう他者を見るたび驚かされるが、何より自分自身がそのような矛盾した態度を取ってしまったような場合、それが悩みの原因にさえなり得る。

とりわけここでは、人間の矛盾の根底にあると思われる利己と利他に着目して、その本質を哲学的に考察していくことで、少しでもその矛盾を解消するための方途を探ってみたいと思う。そもそも私、人間の矛盾の根底に利己と利他の問題が横たわっていると考える理由は大きく分けて二つある。

形式と規則を用いると、意味づけを考えずに機械的のものを作ることができません。意味について考えなくても、可能性をひろげることができ。ケージのプリペアド・ピアノやタイム・ブラケット法は、意味とは無関係な「演算」が作り出す新しい意味の理論といえます。生命も同じことで、無味乾燥なプログラムを回す中で、まだ見ぬ人工生命を探索することで、生命の新しい可能性を、生命の意味論を作り出せるかもしれない。人間のつまらないバイアスで捻じ曲げられないところに、音楽と生命の可能性もある。LLM(巨大な言語モデル)や「チャットGPT」はその可能性を広げてくれるものです。

## 宗教と生きるということについて

**森岡** 「生命」という漢語を使うとサイエンスのようですが、「いのち」という和語を使うと我々のこの問題の側面が大きくクローズアップされます。日本で「生命

一つは形式的な理由。実は哲学や倫理学の世界では、歴史上ずっとこの問題が人間の本质にかかわるものとして議論されてきた背景がある。もう一つは実質的な理由。基本的に人間にかかわる問題というのは、自分という存在を中心を考えるか、それ以外の他者や共同体を中心を考えるかのいずれかだからである。前者は必然的に利己的な発想につながり、後者は利他的な発想につながる。

## 利己的な存在としての人間

まずは、人間存在の本質について本格的な議論が始まった古代ギリシアにまでさかのぼって見てみよう。プラトンが著した『国家』の中に、利己と利他にまつわるギユグスの指輪という有名な逸話がある。

ギユグスの指輪とは、透明人間になることのできる装置のことだ。透明人間になれば、他者から見えないのをいいことにして、悪行を働くのが人間だと説いている。だ

という言葉が使われるようになってのは明治以降のことで、それまではずっと「いのち」でした。万葉集を読むと、いのちを歌ったものが数多く見られます。以前に調べたことがあるのですが、日本語の「いのち」には二つの側面があります。ひとつは人間が生まれて死ぬまでのあいだの意味で、たとえば「いのちが尽きる」というのは個人が亡くなることですね。もうひとつは個人が死んでも続いていくような大きな存在のことで、たとえば「大きないのちに包まれる」とは、そういうイメージです



早稲田大学に隣接する大隈重信の邸宅跡地にある大隈庭園（東京都新宿区）にて

ね。手塚治虫の『火の鳥』には、地上で死んでいく人間を吸い上げて大きないのちへと包摂していく火の鳥のイメージが見事に描かれています。こういった「いのち」のいわば宗教的な面を、これからのサイエンスと結びつけていくことができれば素晴らしいですね。二十世紀に流行ったニューサイエンスのような浅い神秘主義ではなく、現代の複雑系科学や現象学を基礎とした、地に足のついたサイエンスが開かれていくのを期待しています。

## Essay • 1

# 利己と利他の哲学史 今求められる「自分」の再構築

小川仁志

山口大学国際総合科学部教授  
哲学者

▶おがわ・ひとし 1970年京都府生まれ。専門は公共哲学。哲学を人生と社会に実装するという観点から「哲学カフェ」を始め様々な活動を行っている。著書に『前向きに、あきらめる』(集英社クリエイティブ)など。

からこそ国家には法律が必要だというわけである。以降、哲学の歴史においても、人間は基本的に利己的な存在としてみなされてきたといっていだらう。ある意味でそれは、生命を維持するための人間の本質的な側面だったのかもしれない。人間はなんとしてでも生き延びようとする存在だからだ。たとえ悪事を働いても。

これに対して、人間の利他的側

面に着目し、その可能性を説得的に論じたのが、十八世紀スコットランド出身の経済学者であり、哲学者でもあったアダム・スミスである。スミスは神の「見えざる手」で知られる『国富論』の著者で、同時に人間の道徳性を説いた『道徳感情論』の著者でもある。

スミスにいわせると、人間には同感(シンパシー)に基づく道徳感情があるからこそ、他者の気持



ラファエロ・サンティ《アテナイの学堂》1509-10年、バチカン宮殿  
プラトンはじめ古代ギリシアの哲学者・科学者が描かれている

ちを慮ることができ、それによつて初めて、利己心とのバランスが取れた市場の調和が成立する。他方、二十世紀になるとむしろ利他を重視する哲学も登場してくる。リトアニア出身のフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスの説く他者論は、究極の利他主義といつても過言ではないだろう。レヴィナスによると、私たちはむ

しろ他者のおかげで存在しているという。だからこそ、他者への無限の責任が生じるのであり、彼は、それこそが倫理であると主張している。

**自己犠牲とケアの倫理**

しかし、こうした考え方を突き詰めると、自分を犠牲にしても

か自分の存在を軽視している感が否めない。いくら他者が大事だとしても、自分がそのための手段であつていいのだろうか。この問題に批判的視点から取り組んだのが、アメリカの倫理学者キャロル・ギリガンだ。彼女は「ケアの倫理」と呼ばれる分野でよく知られている。

「うつわ」としての利他

近年、東京工業大学に属する学

者たちがまとめた書籍『利他』とは何か?』には、利他とは「うつわになること」であるという人間観が示されていた。うつわだから、そこに他なるものが入る余地があり、かつ自分がそれを入れるというのではなく、むしろ意志を超えて入ってくるというイメージである。

して相手に受け入れられることではないだろうか。そのためには、「自分」という概念の再構築が求められるのかもしれない。

最初から自分の中に他者が入ってれば、たとえ利他的行為が利己心に基づくものであつたとしても、相手に受け入れられる余地が出てくるはずである。テクノロジーの進化もあつて、いやがうえにも今自分という概念は拡張しつつあるように思う。人と人との距離は、心理的にも物理的にも緊密にかつ複雑につながっており、少なくとも、純粹に自分にしか影響が及ばない行為など存在しない。

よつてもたらされているといつても過言ではない。

そういえば、ドイツの哲学者マルクス・ガブリエルが、『わかりあえない他者と生きる』の中で、人間が戦争をする理由についてこんなふう述べている。「それは、私たちは他者も人間であることを理解していないからだ」と。

本来人は、他者のことを自分のことのように考えることができる

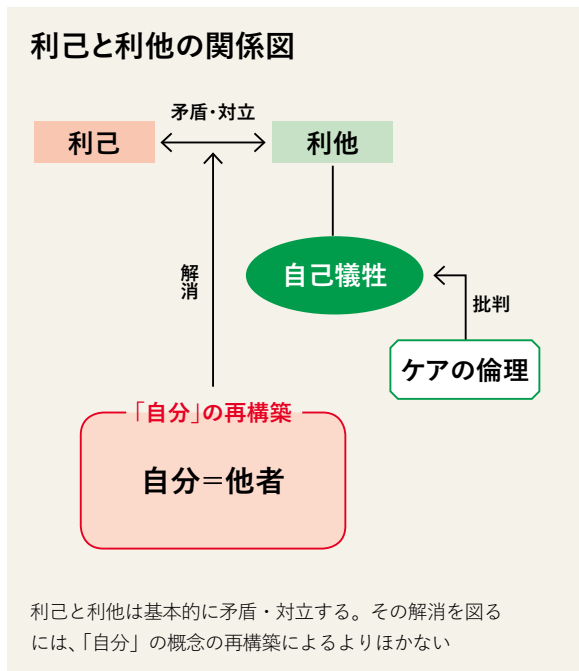
生き物である。にもかかわらず、ひとたびそのことを忘れてしまえば、戦争を始め生命を脅かす数々の恐ろしい問題を引き起こしてしまふ。結局、利己に偏り過ぎて、また利他に偏り過ぎて、生命を脅かす結果を招いてしまうのである。本稿がその大切な事実にくきつけたいことを願うばかりである。

言い換えると、基本的に人間は利己的存在のだけれども、ある時ふと利他的になる、そしてその度合いは人によって異なるということだ。でも、それでは利他心を涵養することはできなくなるだろう。

そう考えると、やはり人が利己心に基づいて利他的行為をするのはやむを得ないように思う。大事なのは、その行為が利他的行為と

自分と利己と利他は融合し、決して対立するものではなくなるに違いない。ただ、それは自分という概念を再構築できるか否かにかかっている。考えてみると、気候変動、格差、人種差別、戦争等々、今世界で起こっているあらゆる問題が、自分という概念の偏狭さに

**自分という概念の拡張  
生命を守るために**



## 生命をどう考えるか

**先** 般、ノーベル文学賞受賞作家の大江健三郎が亡くなった。私は、政治的・社会的発言を含めて彼の主張には共感するところが多かったのだが、一度だけその発言に違和感を覚えたことがある。それは酒鬼薔薇聖斗事件が起こったときに、「なぜ人を殺してはいけないのか？」という中学生の問いかけに対して、大江が次のように回答したことである。

私はむしろ、この質問に問題があると思う。まともな子供なら、そういう問いかけを口にするのを恥じるものだ。(中略)人を殺さないということ自体に意味がある。どうしてと問うのは、その直観にさからう無意味な行為で、誇りのある人間のすることじゃないと子供は思っているだろう\*。

## Essay・2 人・動物・生命系 命の線引きを考える

野家啓一  
東北大学名誉教授  
哲学者

►のえ・けいいち 1949年、宮城県生まれ。専門は哲学、科学基礎論。近代科学の成立と展開のプロセスを、科学の方法論の変遷や理論転換の構造などに焦点をあてて研究している。1994年山崎賞受賞。



プリンストン大学ヒューマン・ヴァリュー・センターの恒例イベントであるタナー記念講演では、多彩なゲストを招き、白熱した議論が繰り広げられる

Photo : Princeton University Center for Human Value

私には、この中学生の問いには、戦争では当然のように人が人を殺しているのではないか、あるいは人間は人間以外の動物、牛や豚を殺してその肉を食べているのではないかと、という根源的な疑問が言外に含まれているように思われたのである。それは「無意味な行為」や「誇りある人間のすることじゃない」で片づけられる問題ではない。むしろ「いのち」というものをど

う考えるかという我々自身の喉元に突きつけられた鋭利な問いなのである。そう考えるならば、大江の答えは「人のいのち」を自明性という特権的領域に囲い込む人間中心主義 (anthropocentrism) の主張、だと言わざるを得ない。

### 人と動物の間にある 命の線引き

他方、二〇〇三年にノーベル文

護されねばならない。問題を生命という次元で考えるかぎり、「なぜ人を殺してはいけないのか?」という問いは、人種差別や女性差別とならぶ種差別 (speciesism) にほかならない。人間も動物種に属するかぎり、それは「なぜ動物を殺してはいけないのか?」という問いへと一般化されねばならないのである。

クッツェーはプリンストン大学のヒューマン・ヴァリュー・センター主催のタナー記念講演に招かれたとき、フィクションのかたちでエリザベス・コステロという老境の女性作家を登場させ、「哲学者と動物」および「詩人と動物」という二つの架空講演を行わせた。しかもその内容は、現代社会で何の疑問もなく行われている工場畜産や動物実験を第三帝国のホロコーストになぞらえるという過激なものであった。

率直に言わせてください。私は、ちほ墮落と残酷と殺戮の企てに取り囲まれていて、それは第三帝

国がおこなったあらゆる行為に匹敵するものです。実際、私たちの行為は、終わりがなく、自己再生的で、ウサギを、ネズミを、家禽を、家畜を、殺すために絶え間なくこの世に送り込んでいるという点で、第三帝国の行為も顔色なしといったものなのです。

しかも強制収容所の存在に当時の人々が薄々気づいていたと同じように、現代人は動物虐殺を知りながら沈黙し口をつぐんでいる、というのである。そのようなとき、とりわけ西欧人たちはみずからの態度を正当化するために、人間は知的生きものであり、「理性」をもっている点で神に近く、その点で他の動物とは異なると主張する。それに対してコステロは「肉食性の二足動物が自分たちの特別な地位を正当化するために適用する理性という基準は、草食性の四足獣によっても同じように適用される」と痛烈に批判する。それは理性の代りに「意識」を基準に持ち出して同様のである。

動物には意識がない、だから、の後です。だからどうなんでしょう? だから私たちは自分たちの目的のために、動物を好きなように利用していいというのでしょうか? だから動物を殺すのも自由だと? どうしてですか? 私たちが認める意識のどこがそれほど特別だから、その種の意識をもった者を殺せば犯罪となり、動物を殺しても罰せられずにすむのでしょうか?

つまりコステロは、われわれが人間と動物の間に意識の有無を基準にして「いのちの線引き」を行っていることに対し、それは正当化できないと抗議しているのである。この問いに正面から答えるとすれば、キリスト教であれ仏教であれ、何らかの宗教的戒律に依拠せざるをえないであろう。旧約聖書には、アブラハムが最愛のひとり子イサクを神に犠牲として捧げることを命じられ、あわやの瞬間に代替の子羊を生贄にすることで

許される話が記されている。つまり犠牲獣は神に捧げられるのであり、人間の食欲を満たすために屠られるのではないというわけである。やがて神はノアを祝福してイスラエルの民にあらゆる動物を支配し、それを食物として利用する権限を与える。これが肉食の起源である。

### 個体の生と生命系の生

コステロは当然ながらベジタリアン (菜食主義者) に設定されている。いわば彼女は人間と動物の間のみならず、動物と植物の間にある種の「いのちの線引き」を行っているのである。この区別は正当化できるのであろうか。前号の『KOSMOS』(第十号)では、生命科学者の中村桂子と植物学者の岩槻邦男が「生命の多様性と死をめぐって」と題する刺激的な対談を交わしている。私が興味をそそられたのは、岩槻の次のような発言である。



# 供養塔 森羅万象といのち

## 早川 篤

天王寺動物園飼育専門員、学芸員

▶1962年生まれ。関西学院大学SDGs・生物多様性研究センター客員研究員。動物園勤務の傍ら、執筆、美術作品の制作やワークショップなど、自然との共生をテーマに活動。

### 命宿るものへの畏敬

**日** 本人は、様々なものの命を畏れ、敬い、供養してきた。

東京都墨田区両国にある回向院には、軍用犬、軍馬、猫、小鳥か

生命の話をしていくと、私はついついヒトや動物の命だけでなく、生きていくもの全てに話を広げたくります。近頃の道徳教育で命の大切さを取り上げるとき、動物は生きていくから大切にしましょうと言います。では植物の花は切っても構わないのか。人間はエネルギー代謝をしなければ生きていけないので、何かを殺さなければ生きていけない。それなのに、(植物まで含めて)生きものを殺すことは全て悪いと説くこと自体がおかしいと思います。命

はそういうものではないはずで

人間は何かを殺さなければ生きていけない。この言葉は限りなく重い。それゆえわれわれは人間と動物のあいだ、動物と植物のあいだに否応なく「いのちの線引き」を行ないながら、命をつないでいるのである。さらに岩槻は「生きる」とはまさにそういうことです。私が『個体』の生より上の階層の『生命系』の生を意識するように主張するのは、生きものは個体で生



J. M. クッツェー『動物のいのち』  
森祐希子、尾関周二 訳  
大月書店、2003年

「哲学者と動物」、「詩人と動物」の題で、小説仕立ての形式でおこなわれたプリンストン大学でのクッツェーの2度の講演と、エイミー・ガットマン(政治哲学)の序文、ウェンディ・ドニガー(宗教学)、バーバラ・スマッツ(霊長類学)、マージョリー・ガーバー(文学)、ピーター・シンガー(生命倫理学)の寄稿で構成。本稿の引用はすべて本書より転載

を完結していないことを認識した  
いからです」とも述べている。  
古代ギリシア語には生命を表わすのに「ビオス」と「ゾーエー」という二つの言葉があるけれども、それを踏まえれば「個体の生」は「ビオスに、「生命系の生」は「ゾーエー(根源的生命の流れ)に対応するであろう。人間も動物も植物も個体の生を営みながら、生命系の生の一部を形作っているのである。そして人間は生命系の流れの中に身を浸しながら、「いのちの線引き」をしつつ他の生きものの生命

**ビオスとゾーエー**  
ともに古代ギリシア語で生命を表わす言葉で、ビオス(bios)はbiology(生物学)の、ゾーエー(zoe)はzoology(動物学)の語源である。神話学の泰斗カール・ケレーニイ(Karl Kerényi, 1897-1973)によれば、ビオスは「有限の生」を、ゾーエーは「無限の生」を表わす。例えば、ビオスが個々の真珠だとすれば、ゾーエーはそれを繋ぐ無限に長い糸である。【野家啓一】

を「有難くいただく」ことでしか生き延びることはできない。それゆえ「なぜ人を殺してはいけないか」や「なぜ動物を殺してはいけないか」という問いに対する答えもまた、生命系の一員として自らが「いのちの線引き」をしつつ生を紡いでいることを自覚するところから出発せねばならないのである。

1 大江健三郎「21世紀への提言」朝日新聞(一九九七年十一月二十日)



松が岬公園(米沢市)の草木塔。同市の田沢地区が発祥とされ、確認されている最古のものは1780年の建立

らオットセイなど様々な動物の供養塔が建立されているし、市場のあった中央区築地の波除神社には、玉子塚、活魚塚、鯨塚、海老塚、すし塚といかにも築地らしい塚がある。また、現代では嫌われものの虫たちも「一寸の虫にも五分の魂」と言われて久しいが、六月四日には全国各地の虫塚で供養が行われる。東北が発祥とされる草木塔は、植物にも靈魂が宿ると考え、その恩恵に感謝し、暮らしのため

塚などもあり、先人が動植物のみならず普段使う道具も命宿るものとして畏敬の念を抱いていたことがわかる。  
**東京のウシ**  
東京都港区高輪にある願生寺には牛供養塔がある。江戸の町を造成する際、京都から連れてきたウシが力を尽くした。歌川広重の「高輪うしまち」には、ウシが引く大八車の向こうに黒船来航後防衛のため急造された台場が描かれている。黙々と重い荷物を運ぶウシは頼もしく、江戸はまさしくウシが造りウシに守られたといえる。  
東京都豊島区の東福寺には、疫牛供養塔がある。近年のコロナ禍同様、物資の流通と疫病拡散は避けることができない。海を越えてやってくる疫病は、人に感染する病気だけではない。十八世紀から十九世紀にかけてヨーロッパで猛威をふるったのが牛疫である。牛疫は牛疫ウイルスによるウイルス性疾患で、高い確率で死亡する。



歌川広重「高輪うしまち」1856-58年『名所江戸百景』より

明治の開国とともにやってきた牛疫ウイルスは明治五(一八七二)年に日本に上陸、六〇七年にかけ大規模な牛疫流行が発生、斃死したウシは四万八千頭を超え、さらに十三年までの間に七万五千頭のウシを失ったとされる。

### ネコとネズミとペスト

十四世紀のヨーロッパで人口の三分の一以上を死に追いやり、黒

死病とよばれ恐れられた疫病がペストである。ネズミとペストの流行に關係があることは旧約聖書の時代から知られていたという。国内でペストが発生したとき、当初はネズミの排泄物から伝染すると考えられ、明治三二（一八九九）年には二十万匹の捕獲作戦を立てて四万円の子算を支出し、ネズミ一匹を五銭で買い上げている。

夏目漱石の『吾輩は猫である』では、車屋の黒が「飼い主が自分の捕ったネズミを交番に持っていき五銭もらい、総計で一円五十銭くらいはもうけてやがるのに、自分にはろくなものを食わせやがらねえ」と背中を毛を逆立てて怒っている。『吾輩は猫である』は、明治三八（一九〇五）年に連載が始まっているが、それに先立って、ペストの感染予防策として「一家に一匹ネズミを捕るネコを飼うように」と提唱し空前のネコブームが起り、その影響で東京では一気にノラネコが増えたというから、ペストが夏目漱石という小説家を生み出すきっかけになったのかも

過去帳には一八〇四年〜一八三七年の間に捕獲されたクジラ二四二頭の種類、捕獲日、場所や捕獲した鯨組の記録が残されている。海で泳ぐことを知らずに死んだ子クジラ七十数体は海を臨む場所に葬られており、毎年春には鯨法会が行われている。

その鯨墓には、「業尽有情 雖放生 故宿人夫 同証仏果」という「諏訪の勘文（神文）」が刻まれている。中世の諏訪明神の信仰に起源し「業の尽きた生きものは、たとえ放しても長く生きられない。だとすれば、贄として明神の神前に供えられ、それを直会で食する人間の功德にも助けられ、ついには畜生の境涯を脱し成仏することになる」といった内容である。そうであれば、捕まえた獲物を明神の贄とするのは決して殺生の行いになるものではないという託宣である。

生きものの命を奪うこと、互いに命がけの駆け引きが終わりを告げるまさにその瞬間、巨大な命の終焉を目の当たりにした漁夫に畏

しれない。夏目漱石が過ごした家の跡地（新宿区早稲田南町）は、漱石山房祈念館と漱石公園になり、公園内には猫塚も立つ。

一方、渋谷区広尾の祥雲寺には鼠塚がある。防疫処置のために買上げられたネズミは、石灰酸と昇汞水（塩化水銀に食塩を加えて水に溶かしたもの、毒性が強くかつては消毒液に使われていた）に浸して樽詰めにされ火葬場で焼却処分された。鼠塚はその際に焼却されたネズミの供養塔として建立された。ペストの感染拡大に、ネズミでなくノミが重要な役割をすることがわかったのは建立後の明治四三（一九一〇）年である。建立時には、まだ疫病をばらまく張本人であると考えられていたネズミの命をも慰霊したのである。

### 品川と山口のクジラ

寛政十（一七九八）年五月一日、品川沖に前日からの暴風雨のために迷い込んだ一頭のクジラを、品川浦の漁師たちが船で囲み天王洲

に追い込んで捕獲する。クジラ捕獲のニュースは江戸中に広がり、見物客で大賑わいになり、五月三十日には十一代將軍家斉が御覧になるということで浜御殿（現浜離宮恩賜庭園）沖まで船で運ばれている。

このクジラの体長は約十六・五メートル、高さ二メートルという日が経ち、さすがに傷みが激しくなると、無駄にはせず肉は食用として販売し、骨を埋めた跡に鯨碑を建て供養している。

豊臣秀吉の刀狩と同時に発令された海賊禁止令以降、組織化された鯨漁が日本の沿岸部で盛んになる。捕ったクジラの霊を弔うため鯨法会や鯨墓や鯨塚、鯨供養塔などの供養が、捕鯨が盛んであった地域ではほぼ例外なくなされてきた。

山口県長門市にある向岸寺には鯨墓・鯨の位牌や過去帳が残されている。捕獲された母クジラを解体するとき胎児がいることがあり、向岸寺では母親とともに胎児にも戒名を贈り鯨位牌として祀り、

敬の念が芽生えたことは想像に難くない。仏教の「輪廻転生」や「山川草木悉皆成仏」という教えの影響もあるだろうが、人として誰もが持っている命を奪う気持ちを整理する術が必要だったのだろう。鯨墓に刻まれた「諏訪の勘文」や供養塔の建立は、クジラの弔いだけでなく、漁夫の気持ちを救うものではなかったか。

### 大阪のネコ

大阪市環境局木津川事務所（大阪市大正区）には獣魂碑と胞衣塚（胞衣とは胎盤のこと）が公開されている。大阪市ではイヌやネコなどのペットが死んだり、路上で死体を見つけたら、地域の環境事業センターで引き取り、火葬される。環境局で焼却されるのは、ゴミとして扱われるという見方もあるかもしれないが、役所の人々は、獣魂碑を建てて供養している。死に関わる仕事はとかく偏見の目で見られがちであるが、命の大切さ、命への尊厳に、誰よりも向かい合

っている。

回向院にも邦楽器商組合による犬猫供養塔が建立されており、大阪市西成区の松乃木神社には三味線を模った猫塚（明治三四年建立）がある。今は棹の部分がなく胴部分の石碑だけが残されているが、猫塚の裏面には次のような句が彫り込まれている。

残さばやちりし櫻純 その句い

櫻純はユスラウメ、梅桃や梅桜ともいふ春にはウメやサクラに似た可愛い白や淡紅色の花を枝いっぱいに咲かせる。

「ユスラウメの花は散ってしまっただけ、その句いは心に残しておこうじゃないか」

そこには、生と死、愛することと殺すこと、そんな想いが相反することなく飄々と共存している。



右／大阪市環境局の獣魂碑

撮影：花城三喜氏

左／回向院（東京都墨田区）の犬猫塚。明暦の大火に始まり、災害犠牲者や無縁仏を祀り、さらには生あるものすべてを供養してきた



海を臨む場所に立てられた向岸寺の鯨墓と諏訪の勘文（山口県長門市）

撮影：寺島和利氏



# 孤立とケアと死

## 新たなケアの文化の生成と死生観

島 蘭 進

大正大学地域構想研究所客員教授  
宗教学者

▶しまぞの・すすむ 1948年東京都生まれ。宗教学をベースに、死生学やスピリチュアリティなど境界をこえて幅広く活動。著書に『日本人の死生観を読む』など。

### コロナ禍における孤立と死

コロナ禍では孤立に苦しむ人、孤立を恐れる人が増大した。介護施設などに収容されている高齢者、病院で療養生活を余儀なくされた人、貧困に苦しむ人、頼れる人がいない人には辛い時期だった。コロナ感染症に罹患した人を

治療したり、ケアする仕事の人々も厳しい状況に追い込まれた。医療や介護、保育やさまざまなサービスの仕事を担う人々がエッセンシャルワーカー（キーワーカー）とよばれ、そうした人々を支援しようという声も高まった。コロナ感染症が厳しかった二〇二二年に、早川千絵監督『PLAN75』という映画が上映され、話

題を呼んだのは偶然ではないだろう。『PLAN75』は、七十五歳以上が自ら生死を選択できる制度が施行された近未来の日本を舞台にした作品である。倍賞千恵子が演じる主人公の角谷ミチは夫と死別し、長年ひとり暮らしで暮らしてきて七十八歳になる。ホテルの客室清掃の仕事も失った今、居場所のない余生よりは安楽死を選ぶ気になる。だが、そのように高齢者を「処分する」社会とはどのようなものだろうか。制度に翻弄される高齢者自身の心情とともに、高齢者に向き合う仕事に就く若者たちが制度に抵抗しようとする姿勢も描かれている。

この十年ほどの間に、安楽死を認める国や地域が欧米の各国各地域で増えてきている。少子化社会で高齢者がお荷物と感じられていく社会で、「死の自己決定」が容認されていくのだが、まるで社会の再生産コスト軽減が目指されているかのようだ。孤独な人、孤立する人が増えていく。高齢者、障がい者、依存症者、配偶者や子ども

を失った人、ケアに追われる人、孤立する若者、引きこもる思春期の男女、外国人、被虐待児とその親たちなど。安楽死を選ぶ人が多い社会とは、これら孤立する人、孤独な人が増え続ける社会でもあるだろう。安楽死は自己の苦しみに耐えられない人が死を選ぶという建前だが、本人が「見捨てられた」と感じていたり、「これ以上、人さまに迷惑をかけたくない」と考えていたりすることが多い。「私などいい方がいい」として自死を選ぶ人はどうか。ケアされない人が増え、やがて「処分」される「PLAN75」の未来社会とは、効率化を求めて忙しいために多くの人がから居場所を奪う社会のようでもある。

### 孤立と死と宗教の役割

二〇二〇年代に入った日本では、高齢者から子どもたちに至るまで、スマホやパソコンで多くの人々と「つながって」いる。SNSな

どで、他者とのつながりを確認し続けるのにかなりの力と時間を注いでいる。だが、いざというとき、それらのつながりはあつという間に薄れてしまう。死後も機器上に相手はいるが実在はしていない。実際はオンライン上のつながりは失われやすい。わが身を顧みると、実在しているからこそ大切な他者は数少ない。すぐそこに孤独が見える。死を前にした孤独もそう遠いものではないと感じられる。

徳島大学の山本哲也准教授のグループによるコロナ禍の心理的影響の調査が二〇二二年二月四日のNHKウェブニュースで報道された。緊急事態宣言が出された大都市を中心にオンラインのアンケートでのべ五万人から回答を得たものだ。それによると、家族や友人との交流が減り「社会的に孤立している」と感じる人の割合が増加しており、なかでも十八歳から二十九歳までの若年層は、二人に一人が社会的な孤立を感じ、「死にたい」と思ったことがある人は四人に一人のぼつているという。

このように孤独と死を身近に感じる傾向は、コロナ禍によって強まったが、すでに一九七〇年代あたりから次第に進んでいた。こうした状況でこそ、死別の悲嘆は心に重くのしかかる。この時期にグリーフケアが注目を集めるようになってきたのは、こうした事情が背景にある。これはまた、新たなケアの文化や「利他」の実践の興隆を示すものと捉えることもできるだろう。

この二年間に世界各地で生じているのは、弱い立場の人たちが死や貧困やいっそうの苦境に追い込まれるということだ。孤立しやすいう状況の人たちがさらに孤立を深める事態が進んでいる。こうしたときにこそ宗教が苦難や悲嘆のなかにある人々に手をのばすべきなのかもしれない。しかし、このパンドミックの一つの特徴は宗教活動が行いにくいことでもある。これは世界的な現象で、感染拡大を避けるためには他者との接触を控えなくてはならない状況が、宗教にとって大きな打撃となっている。

### 生活上の困難の広がり 精神的な価値

日本の場合、東日本大震災では苦難や悲嘆のなかにある人々に宗教・宗派の枠を超えた支援活動が広がり、宗教の存在感が高まった。ところがコロナ禍ではそのような例は少ない。他方、感染を避けるために葬儀の簡略化が進み、悲嘆を受け止める大切な宗教儀礼の場が縮小する事態も生じている。何とかオンラインで新たな接触の形態を模索する動きや、路上生活者や外国人の支援で宗教者の支援活動が注目されるような例もある。しかし、宗教団体や宗教者の存在感の後退という印象は免れない。人々の精神的な苦境を示す数字は多い。厚生労働省と警察庁によると、二〇二一年の全国の自殺者数は前年より少ないが一九年よりは六百六十一人多い二万八百三十人だった。女性の自殺は二〇年、二一年と続けて多い。原因・動機別では「生活苦」が増え、長引くコロナ禍が影響しているという。

自殺防止に取り組む民間団体によると、「コロナ禍前に比べると、生活困窮を訴える人からの相談は約三割増えた」といい、各種の世論調査をみると、コロナ禍で不安やストレスが増大したと答える人は多い。人間の力では克服できない困難に見舞われ続けているという認識は広まっている。こうしたときこそ、物質的な価値を超えた精神的な価値が見直されるべきだろう。

では、それはどのように現れてきているだろうか。たとえば子ども食堂はコロナ禍でも増えている。コロナ禍で人は集まりにくいのだが、減っていてもおかしくないのだが、二〇年には四千九百六十箇所だったのが、二一年には六千七箇所が増えている。「全国子ども食堂支援センター・むすびえ」の湯浅誠理事長は記者会見で、コロナ禍が増した理由を「子どもの居場所が減少していることへの危機感がある」と指摘した。二〇二一年に始まる子ども食堂だが、この十年間、増え続け、コロナ禍

でもそれが続いている。

## 子ども食堂と新たなケアの文化

困窮している家族や子どもはコロナ禍で増大し、そうした人々に対するケア活動は増えている。これは新たな「ケアの文化」の現れと見ることが出来る。一般社会で接触を避けるように促されるときにも、あるいはそうしたときにこそ不可欠のケアはある。医療、介護、保育、教育などの仕事であり、その職種の人々はエッセンシャルワーカーとよばれる。コロナ禍によって、社会はこうした人々の仕事の意義を見直さざるをえなかった。これまでの、できるだけ予算をカットし、人員を減らす方向を見直し、報酬の引き上げや人員の増加へと向かう動きもようやく見えてきている。

だが、こうした動きに先立って、子ども食堂が登場したことは興味深い。この数十年間の財政政策により、弱いところにこそ必要とされるケアのための費用を切り詰め

てきたのだが、それが限界にきている。子ども食堂はそのような日本社会のケア逼迫状況を人々が自発的に修復し、新たなケアの関係

を掘り起こしてきたものと捉えることができる。いわば社会のレジリエンス（回復力）を示すものだ。経済効率や業績主義に高い価値を置くのは資本主義社会の特徴だが、八〇年代に始まる新自由主義

によって、その欠点を抑えたり、補うような社会資源が弱められていった。新たなケアの文化は、そうした現代資本主義社会の弱点に対し、生活世界の基盤から起こってきた見直し立て直しの働きと見ることでもできるだろう。コロナ禍は効率と業績に引きずられる社会の弱さを一段と露わにした。コロナ後に見えてくるのは、新たなケアの文化のさらに豊かな展開となるだろう。

## グリーンケアの広まりと伝統宗教

そこで求められている新たなケアの文化は、かつては地縁・血縁

関係や宗教などが伝えてきた文化資源にかわって登場してきているものだ。その意味では、東日本大震災以後に目立つようになった宗教者や宗教団体の支援活動とも通

じるところがあり、一九八〇年代から次第に広まってきたグリーンケアの文化ともつながるところがある。

グリーンケアは典型的には死別による重要な他者の喪失に苦しむ人へのケアであるが、広くは大切なものの喪失による悲嘆に耐えていくのを支援することを指す。かつては家族や地域の人々が参加する分厚い甲いや相互扶助の文化があった。しかし、次第にそうした文化は薄れていくようだ。葬儀の簡略化は急速に進んでおり、コロナ禍がそれを加速した。アカデミー賞の外国語映画賞を受賞した映画「おくりびと」が上映されたのは二〇〇八年から九年にかけてだ。閉ざされたシャッター街が見える大都市で、離散してゆく家族の寂しい死別の情景を映し出しながら、死者を送り悲嘆をとにもする

## 生物多様性と人間の未来

経験の意義が問われていた。その数年後に東日本大震災が起きた。津波などでいのちを奪われた人の数は二万近くにも上り、福島第一原発事故もあいまって多くの方々が住居を失い、長期の避難生活を余儀なくされた。家族が犠牲となり、取り残されたと感じる数多くの被災者がいた。岩手、宮城、福島の三県などの被災地には多くの支援者や支援グループが訪れた。当初は支援物資を届けることや炊き出し、瓦礫の片づけなどが主な活動だったが、長期の仮設住宅生活に移る頃から、次第に「お茶っこサロン」などで話を聞く活動が増えていった。ふだん説法をすることが多い宗教者も被災者に寄り添い聞き役に回る人が多くなった。ボランティア的な支援の様態だがそれが歓迎された。宗教宗派を超えた宗教者の「カフェ・デ・モンク」はその代表的なものだ。

これは、宗教界も新たなケアの文化に参加する動きと見ることもできる。しかし、死や死別への人々の関心は宗教という枠を超えて広がっている。二〇一九年にノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロの『わたしを離さないで』

(二〇〇五年)は、近い将来に臓器提供を行うことで「使命」を果たし死んでゆくことが予定されている子どもたちの物語、天童荒太の『悼む人』(二〇〇八年)は見捨てられるようにして死んでいった人たちのことを記憶することを課題



若者が、敬遠されがちな死について語り合うイベント「SOTOPA CAFE」。骨壺ラテのメニューや「自分らしい最期」を書いた卒塔婆(下)など、ユニークな仕掛けがコミュニケーションの場を盛り上げる  
写真提供：studio-L

とする青年の物語、いとうせいこうの『想像ラジオ』(二〇一三年)は愛する人への思いとともになお空中にさまよう津波による死者が、人々と語り合いながらあの世へと旅立ってゆく物語だ。

死や死別に大きなウェイトが置かれた映画やまんがやアニメ作品も少なくない。吾峠呼世晴のまんが原作を劇場映画化した『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』(二〇二〇年)は記録的な興行収入となり、新海誠『すずめの戸締まり』(二〇二二年)も多くの若者の支持を得たが、そこでは死者のいる世界、死後の世界を思わせる光景が描かれ、重要な場面となっている。グリーンケアや哲学カフェ、死生学カフェ、デスカフェなど、死別の経験について、また死をどう考えるかについて語り合う集いも増えている。デスカフェは一九九九年、スイスの社会学者が妻をなくしたことをきっかけに、死について語り合う場を思いついたこと

から始まり、イギリスの社会起業家がフォーマットを定め、現在は世界七十か国で開かれているものだ。

孤立する人、孤立を恐れる人が増え、ケアし合う関係の意義が、また「利他」の意義が見直されている一方で、さまざまな位置から死を通して生命を見直す試みも進められている。これらはいずれもかつては宗教の領分に関わるものと理解されていた。ところが、二十一世紀の前半には、それは宗教の枠を超えてさまざまな形で考えられ、実践されるものになっていく。だが、それは宗教が不要になるというのではないだろう。拡散していくように見える新たなスピリチュアルな文化だが、あらためて宗教伝統の重要性を思い起こすことにもつながっている。八十億を超えた世界の人々の全体を見渡せば、宗教の重要性はあらためて指摘すべきことでもないだろう。

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会  
情報誌 KOSMOS——こすもす

第11号

2023年3月31日発行

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会  
〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2番136号  
TEL:06-6915-4500 FAX:06-6915-4524  
URL:<https://www.expo-cosmos.or.jp/>

制作協力 株式会社ブックエンド  
デザイン ごぼうデザイン事務所

©Expo'90 Foundation All rights Reserved

## 編集後記

輪廻転生の考えがある仏教では、人が亡くなった時「死有」から生まれ変わる時「生有」までを「中有（中陰）」と言い、日本仏教での中有は、7日サイクルで、初めを初七日、次をふた七日、そして、七たび（四十九日）繰返した暁には、新たな生命体として、この世に誕生するのだそうです。満つる中有である満中陰、この春に経験しましたが、大切な生命、巡って身近にあってほしいものです。生命は他の生命と関わる「共生」として存在しているのですから。

(花博記念協会S.M.)

## 『KOSMOS』の誌名にこめた思い

本誌のタイトルは、COSMOSではなく、あえてKOSMOSとしています。どちらも意識・心の領域をも含めた「秩序と調和の宇宙」を意味しますが、真の共生の在り方を探る本誌として、古代ギリシアの哲学者たちが自然科学を論じたときに用いたKOSMOSを使うことで、人類の本質的課題にアプローチしたいと考えています。

## 表紙の解説

### 「青竹色」「若竹色」「老竹色」

緑は黄と青の中間色で、古くは「あお」と呼ばれた。植物に由来する名が多く、なかでも古くから自生し、生活に身近な植物である竹は、色名にも数多く登場する。成長した青竹のような青みが冴える明るく濃い緑は青竹色、より明るく黄みを抑えた爽やかな緑色は若竹色、黄みの鈍い緑は老竹色と呼ばれる。

[写真] アカウミガメ、オキナワキノボリトカゲ、マリモ、アオミオカタニシ、ヤイロチョウ

(日本のレッドリストより)